中二病

渡島医師会
なるかわ病院　吉田晶子

干支も今年で３回転しました。10年ひと昔と申します。同期たちもだんだん肩書が付き始めるようになりました。私は七飯町で精神科医をしていますが、役職の苦労を目の当たりにしていると、一生ヒラ医者が自分には向いていると強く思っています。当院は初期研修の協力病院になる話もあり、いよいよ先輩風を吹かしてみるか、などと不謹慎な考えを抱いています。

数年前でした。20代の終りごろ、ある先生に「おまえは研修医気分が抜けない。無責任な行動ばかりする」と叱られました。当時は自分に自信が全く持てませんでしたし、これからの方針も定まっておらず、言い返すことができませんでした。侮辱された気がして憤りは覚えましたが、釈明することは見苦しく思えて、黙っていたことを昨日のように思い出します。その鮮烈な記憶は消えませんが、今なら、その先生に宣言できます。「私は『中二病』です！」と。

ご存知の先生方も多いと思いますがWikipediaによると、**中二病**（ちゅうにびょう）とは、「『中学2年生頃の思春期に見られる、背伸びしがちな言動』を自虐する語。転じて、思春期にありがちな自己愛に満ちた空想や嗜好などを揶揄したネットスラング」と定義されています。

このように、中二病とは正常発達の一段階と言えると思うのですが、どうやら私は疾風怒濤の思春期で成長が止まっているようです。変化した点と言えば、中二病であることを薄皮一枚で隠蔽していることと、ヘビースモーカー、大酒家になったことです。相変わらず反抗心、好奇心旺盛で、向こう見ずなことばかり仕出かし、周囲を困惑させ、小児的万能感はいまだ活発です。かなりの失敗も重ねましたが、一向に学習しません。このような文章を抜け抜けと投稿致しますのも、この病気が遷延している証拠でしょう。

ただ、私は恵まれているな、と思います。こんな怪しげな人間を選んでくれた夫、愛情深く育て接してくれた家族、そして理解ある職場の方々、出会ってきた患者さんたち、何が一つ欠けても、今現在の自分は成り立たないと感じています。私は、中二病であり続けるというか、そうとしか生きられないと薄々理解しつつあります。これからも、いろいろな人たちにご迷惑をたくさん掛け、失敗し、いい加減なこともし、懲りない人生を歩むと思います。

先にお詫びしておくと同時に、心から伝えたいです。「ありがとう」と。

新春を感じる瞬間

旭川医科大学医師会
旭川医科大学　救急医学講座　藤田　智

1．お雑煮を食べたとき
2．朝病院に行く時の交通量の少なさ
3．通勤の時に流れるラジオ番組
4．病院駐車場に止まる車の少なさ
5．病院の廊下を歩く人の少なさ
6．おめでとうございますと声を掛けられたとき
7．救急外来の待合室の患者数の多さ
8．夜勤明けの看護師の疲弊した顔
9．鳴り続けるホットライン
10．電子カルテを見た時の日付
11．救命病棟の空きベッドの少なさ
12．いつもより楽なベッドコントロール
13．臨時の手術の多さ
14．コンビニエンスストアの中の飾り付け
15．コンビニエンスストアの棚の商品のなくなる速さ
16．レントゲンを撮るまでの時間の長さ
17．書類を書いた時に思わず年のところを間違えそうになるとき
18．定時になっても少なくならない待合室の風景
19．待合室での患者さんの服装
20．帰りの交通量の少なさ
21．家でテレビをつけたとき
22．届いた年賀状を見るとき
23．コンピューターの画面がお正月仕様になっているのを見たとき

いつもとあまり変わらない休日ではあるものの、微妙な違いが新春を感じさせてくれます。また、新たな年が始まったのだということを感じながら仕事を続けていくので、仕事始めという感じにはなりませんが、これが私の新春です。